

## 翻訳・ジョン・プレブル著『ダリエンの大惨事』

Translation : John Prebble, *Darien Disastor*, 1968

渡辺 邦博

WATANABE Kunihiro

### 1. はじめに

以下の翻訳は、ジョン・プレブル John Edward Curtis Prebble 著『*Darien Disastor* ダリエンの大惨事』メインストリーム・パブリッシング、1968年刊を底本としている。著者は、1915年6月23日生まれで2001年1月30日に逝去したカナダのジャーナリスト、ないしは歴史作家である。

今のところ、とみに便利さをましつあつて、訳者は幾ばくかの危険の可能性も感じるのだが、インターネット上に存在する経歴を簡単に記して、著者の仕事を理解する縁としておく。

彼はイングランド・ミドルセックスのエドモントンに生まれ、兄弟がいたカナダのサスカチュワンで育った。両親は、第一次世界大戦後にカナダに移住したが、その後、家族がイングランドに戻ったので、彼はラティマー校に通った。その後連合王国で政治活動に加わったが、第二次世界大戦の後にそれを辞めた。

もっともよく知られている彼の仕事は、スコットランドの歴史に関する研究であるらしい。

この邦訳は、訳者の不手際で、冒頭部分の作業がデジタル上の不具合で現在のところ使用できなくなっているため、今回の部分をまず活字にすることとなったことをお断りしておこう。すなわち、訳文は、原書の第1ページからではなく、第10ページから開始されている。今後できるだけ速やかに原書の最初の部分を補充して、訳稿を完全なものにしたい。

今回の訳文は、スコットランドの屋台骨を揺るがす結果となった、この壮大なダリエン計画の立案者、ウィリアム・パターソンに関する記述が主なものであるから、翻訳が何であるかを理解するには、むしろまず、この部分を判読する方が本書の理解に資するとも言えるかも知れない。

### 2. 第1章 すばらしい計画

p. 10

『交易は交益を増加させる、さらに貨幣は貨幣を生む』

ロンドン、1695年5月

彼は、生粋のスコットランド人行商だった。この言葉は、最初は一枚の英語の滑稽な詩で作成された皮肉であるが、その後、彼の同国人全体に対する蔑称として採用され、

後になると、同じ人たちによって身を守るための自負として受け入れられたものであった。ただ一枚だけ知られている彼の肖像画は、彼の手になるおびただしい数のパンフレットの中の一冊用の一枚の挿絵であるが、それは、戯画であることを斟酌しても、充分奇っ怪なシロモノである。それが、ウィリアム・パターソンがまだ存命中に出版されたのだから、似顔絵という点では、率直な作品かも知れない。そして、それが生煮えであるとしても、彼の人柄についてなら、彼の言動から引き出せる以上の何かが存在している。つまり、突き出て、鉤状に曲がった鼻、自分で考えた結果を熱烈な確信にして放出するために開かれた口、失望によって憂いを含んだ目玉などである。時代に応じた本能的性質を有する多くの人間と同様に、彼は自分と相反して、大酒飲みでいて真面目な禁酒家のように見えたり、息苦しいほどの頑固な趣でいて寛容であったり、個人的な財産よりも国民的富の主張者であると思えば、長い間ではないが、生まれや特権によって引き延ばされた成金のように見えた。彼の不滅の業績とみなされうるものは、比較すると奇妙なのだが、イングランド銀行とダリエンのペンペン草も生えない水路とである。

同時代人による混乱した推論に照らせば、理想主義的で、融通がきかず、せっかちだったから、明らかに成功するのが確実となった瞬間に、その銀行から手を引くと思えば、厳しい失敗が避けられない事態に直面しても、ダリエン計画の遂行に彼が断固として力を尽くしたとしても、不自然な訳ではない。

彼の人生のほとんどは、彼が筆から編み上げた何千という言葉の中には記録されず、言及されないままの謎にとどまっており、我々の目の前にあるのは、彼の敵が用意した、口汚いスキャンダルだけなのである。言い伝えが示すのは、彼の生まれが、ダムフリースのスキップミアで、裕福な農業者あるいは、貧しい耕作者の息子だったとすることである。彼は、秘密集会への対抗上、主教派が、夜間騎兵の鞍に跨り、家族は散り散りになり、西部諸州の善良な男たちが、神の栄光や自らの境遇を守るために、国外追放や亡命を余儀なくされた、殺戮の時代に育った。同じ言い伝えによると、彼の父親は、牧師職へのお膳立てとして、彼に十分な教育を施したので、17歳の時、彼はチンウォルド教区の上手の丘に住む不法な聖職者の食料や情報を運んでいた。モンマスの煌めく甲冑とグレアムの赤い羽根飾りが信仰契約のためにやってきた時、彼はまたクライド川沿いのボズウェル橋の所におり、それに続く血まみれの迫害の間には、イングランドに逃亡していたとも言われている。

「彼は、ずっと若い時に、そこから印刷物が現れるはずのリュックを背中に背負って、スコットランドからやって来た」と、彼の軽蔑したライバル・ウォルター・ヘリーズが、述べている。このヘリーズにとってパターソンは、かつては本物の行商人であったが、その後は、当人の夢が元になった眩しいリボンを同郷人に売りつけるペテン師ともなる、いつも変わらぬスコットランドの行商人であった。パターソンの若い時が何であれ、それによって彼は、先見の明でも教育においても、並みの人間に留まらない存在となった。彼は見事な腕前でものを書き、そこには明らかに筋が通っていた。彼は幅広く書を読ん

だ歴史家であり、哀れみがない信仰は何ら宗教ではないと考える神学者であった。彼は、土木工学、数学、財政やビジネスに関する実際的な知識を備えており、生涯を通じての勤勉な探求者であった。ヘリーズの証言では、イングランドで数年過ごした後、彼は行商人の盛皿を捨て、「説教の仕事は、自分のそれよりもはるかに易しい仕事だと悟ったオックスフォード近くの、熱心な寡婦の庇護の下に収まったが、間もなくアナダップの精神がもともと備わっていると考えるようになったのであった。一般に預言者はその国内では軽蔑の眼で見られるのだが、布教のためと言うことで、西インドに渡り、二度プロヴィデンス島に留まった人々の一人となった」。華やかではなかったが、言い伝えは次のように述べている。19歳までブリストルの親戚の家に住んだ彼は、親戚の女性が1674年に亡くなるに際して、彼女が残した少くない財産によって、カリブ海行きの切符を手に入れたのだった。これが本当ならば、5年後に彼がボズウェル橋のところで貴族の階級となったと言う勇ましい話には根拠がないことになる。

彼が西インドにおいて、この7年から8年間にやったことは定かでないが、植民地の提案をする際に、経験があったと言うことで権威を付けたことを例外として、彼がそれを書いたことは全くない。彼が西インドで正直で誠実だという世評を得たのは事実だし、彼が商人として営業を行ったと言うことも根拠のないことではない。彼が海賊<sup>バカーニア</sup>つまり、モーガン、アヴェリヤやシャープ、ダムピアやウェイハー、あるいは、三日月状の砂浜に長いボートを着岸させたり、ヤシの木陰で、葉巻を燻らして、ポートベロを略奪し、古の勇者のようにあの地峡を横切ったその他の忘れられた男たちの仲間として、ある程度の時間を過ごしたと言われても、おかしいことではない。彼がヨーロッパに戻った時、ヘリーズは述べた。彼の頭は、「サー・ヘンリー・モーガンや、シャープ隊や海賊たちの成し遂げたことをすべて自分の財布に入れた、企てで一杯」だった、と。彼がそうした男たちを知っていたと言うことは、ほぼ間違いなく、彼らや、ブルーフィールドやポート・ロイヤルで彼らと航海した人々に顔が利くのはた易いことであった。1679年の旧シャープ軍によるポートベロ侵入の際の古参兵のひとりであったロバート・アリストンは、確かに彼の友人であった。そして、パターソンが、パナマの北海岸にある、緑で美しい国、鋏が入らずとも土地が果物を産み出す、高貴で、飾らないインディアンが露天の金の秘密を知っており、青々とした溪谷を過ぎると太平洋に至る、ダリエンのことを最初に聞いたのは、おそらくアリストンか、ウェイハーからだったであろう。パターソンがダリエン、ないしは中央アメリカ大陸の一部分に上陸したと言う記録はないが、もし彼がそうした経験があれば、彼の同国人たちにとっては、もっとよかったのだが。

海賊たちからの話をもとにして、彼は、その地峡をまたぐ商業植民地、西側からの諸商品が東側からの諸商品と交換されうる工場と要塞からなる自由貿易「倉庫」、あるいは大西洋と太平洋との交易路に関する彼の構想を造り上げた。それは200年後のパナマ運河を先取りし、長時間にわたるアフリカ回り航海を不要とするものだった。後に彼は、素晴らしい一文の中で、彼の同国人たちにこれを説明することになった。

「中国、日本、そしてスパイス諸島、さらには東インドと言う想像を絶する地域への航海の時間と費用とは、半分以上縮小される。そしてヨーロッパの諸商品と工業製品との消費は、間もなく二倍以上となる。交易が交易を増加させ、貨幣は貨幣を産む。交易の世界は、早晚人手のための仕事ではなく、仕事に対する人手を必要とするようになる。こうして、海洋へのこの扉と、宇宙への鍵とに、何がしかの合理的管理をとまなえば、おのずとその植民地所有者は、労苦、犠牲そして危険に頼ることなく、アレグザンダーやシーザーによる犯罪や流血を少なくして、二つの大海を従えることができる。」

それは、想像上の、活力旺盛で、思いやりにあふれ、無邪気な人間についてのひとつの人物描写である。

1680年代の中頃まで、彼はヨーロッパにあり、この夢を売り歩いていた。ロンドンで商売を営んでいたスコットランド商人ロバート・ダグラスは、パターソンが、まともに取り扱えば危険にもなる饒舌な存在であると考えていたが、彼がいつもダリエンの話をする、アムステルダムのコーヒーハウスでよく見た人物だったというのを後年思い出した。「彼は自分の商品に対する販路をオランダやハンブルグで作り出そうと努力していた」、と述べるヘリーズもまた、「しかし彼は成功しなかった。後に彼はベルリンに赴き、そこで荷をあけて、すんでのところブランデンブルグ選挙侯を罾にかけようとしたが、やはり不首尾に終わった。」

西インド、オランダ、もしくはハンブルグのどこかから、パターソンはわずかな財産、あるいはわずかな財を成すための基礎を手に入れたので、1687年ロンドンで商人として独り立ちした時、彼はすぐに、成功しただけでなく、力のある存在となり、他のスコットランド商人たちや、ジョウジフ・コーエン・ダゼヴェドのような裕福なユダヤ人たちの仲間となった。ロンドンで彼はまた、サルトーンのアンドルー・フレッチャーにもまみえることになったが、この高潔なスコットランド人愛国者は、聴衆をうんざりさせて無関心にしてしまうパターソンのお粗末な話術の背後に、優れたアイデアを見てとった。ダルリムプルの『回想』に従えば、サルトーンはパターソンに、ヨーロッパで勢力を握るという希望を捨て去り、「同郷人のための彼のプロジェクトの命運に信頼において、彼らにそれから生ずる利益、栄光そして権力だけを持たせる」ように告げたのであった。しかし、パターソンは、スコットランドをあまりに長く離れ過ぎていた。正当にも彼は、スコットランドには、資本と資源の双方が不足しているのを忘れてはいなかった。それだけでなく、彼は、どんな国にしても一国でこの計画の資金を供給できないし、その利益を享受すべくもないと信じるような、国際的な視野の持ち主であった。

彼はロンドンでは成功した。彼は、「革命」で流布することになった自らの政治原理だけでなく、勤勉かつ企業心の持ち主だったので、おのずと、偉大な人物や新たな考えと手を結ぶことになった。彼はある会社の設立を助けたが、その会社は200年も生き延び、北部ロンドンにハムステッドヒルズからパイプで水を供給することになったし、

後にサザックに同じような会社ができ、彼は出納係となった。彼は、リンカーンズイン・フィールドからケンジントン村までへと伸びた、威厳がある広場と通りの計画を、西部土地開発のセオドル・ジャンセン卿と連携していたと言われる。黙殺されたのだが、情けないほど削り取られた鑄貨を適切な価値に戻す、優れた提案を作成した。1693年彼は、商人グループの代理として、下院の委員会に現れ、国会の保証に基づく信用計画を、見事な手際で説明した。その次の年にこれを基にしたイングランド銀行が創設されると、彼は最初の理事の一人となったが、ほかのメンバーと言い争いがあって1695年に辞任した。多くの人が彼の知性と才能には尊敬の念を持っていたが、彼に好意を持てる人はほとんどいなかった。彼にはユーモアがなく、退屈させ、およそどんなことにも、気が滅入るほど生真面目であった。「彼が公の場に出ると」と、ヘリーズは述べた。「彼は、まるで背中に地球の重みを背負っているかのように、仕事と責任のことばかりを考える頭になって現れるのであった。誰かが賢明であると評価されたいと思うなら、成功するために取るべき第一歩は、パターソンの顔を真似ることであった。いや、誰でもよい、何か奇跡を思いついたのなら、彼はこうしても良い。エンジンの話を開始して、島の半分だけ方向転換して、シリー諸島のあるところにオークニー諸島を送ると言う芸当をしてもよい。」と。

サルトーンのような人だけは、パターソンの頑固なまでの正直さや、政治、宗教、交易が繁栄する元となる腐敗に対する彼の軽蔑を賞賛することができたのであった。彼は、「賄賂、詐欺、計画的不正行為、意図的な破産、ペテンと窃盗行為」を憎み、「それが原因で、価値を下げたり、質を落としたりすることには縁がなかった。それらは、すべての中で最悪で最も憎むべきものだったから。盗人を絞首刑にするのを考え出した人が、この種のことから着手しないのは、奇妙である」と。

彼の住まいは、デンマーク通りの、セント・ジャイルズ教区にあり、ソーホー・フィールドの外れの、快適なテラスハウスであった。妻の名前、その性格、家柄や外見は、パターソンの生涯のほとんどを彩る暗闇の中に、姿を消している。ヘリーズの言うには、彼女は「赤ら顔の、社交的な婦人で、バーチン・レインの未亡人」であった。<sup>1</sup> いずれにせよ、彼女は夫に忠実で、彼の行商人の荷物を自分自身の荷であるかのように考えていた。その結果、彼女のものとして残ったものは、ダリエンのカレドニア湾沿岸から数ヤードのところにあるものだけである。

革命以来のほとんどの年にロンドンで開始されたのと同様に、1695年の春が始まった。ウィリアム王は、砲声と歓声の嵐について、馬車でグロウヴズエンドに向かい、ヨットに乗り込み、フランダース行きの自らの艦隊に合流した。フランダースで、ルイ14世との恒例のトーナメントを再開するためであった。オールド・ベイリーの治安判事裁判所では、窃盗、贋金造り、追い剥ぎ、殺人犯、スリ、カップライなどが、またし

---

<sup>1</sup> ヘリーズによると、彼女はパターソンの二番目の妻だったようだ。誰が最初の妻だったかは、彼女が「オックスフォード近くの温かそうな寡婦」だったこと以外には、誰も知らない。

でも、死刑、火あぶり、鞭打ちの判決を下されていた。真新しい礼服姿のカット卿の連隊が、国王に随行する前にハイド・パークで演習を行ったが、国民には、他日閣下が国王陛下の人民を守り、敵の軍勢を袂くべく要請を受けて合流するはずのファースト將軍の出番があると報じられた。5月の半ば、ジェイムズ・チーズリーが、デンマーク通りにパターソンを訪ねた。彼は、デイヴィッド・ネルン、ジェイムズ・リース、ロバート・ダグラスやジェイムズ・ファウルズのような、多くのスコットランド商人のひとり、エディンバラよりもロンドンの交易によってはるかに大きな自由と多額の利潤を享受していた。彼らの全てがデンマーク通りにちよくちよく現れる客であって、彼らの誰もがパターソンの多弁に飽き飽きしてはいても、おそらくは彼の節度ある包容力を残念に思っており、彼の元来の人となりや組織に関する熟達を尊敬していた。チーズリーは、オルハロウズ・ステイニングのシティ教区にある家からやって来て、スコットランドからの知らせを語った。5月9日の木曜日、スコットランド議会の第5会期が開催された。終に、グレンコウの虐殺の調査委員会が開催され、会期の成り行きは、その報告をめぐる厳しい論争になるのは確実となった。しかし、チーズリーや、ロンドンとエディンバラのその他のスコットランド人たちを特に興奮させたのは、議会における国王の代理、トウィードデイル侯が述べた開会の挨拶の一節であった。彼は議会で次のように述べた。

植民地が合法的に獲得されるような、アフリカ、アメリカ、あるいは世界のその他どのような部分においてであれ、植民地を獲得し、あるいは建設することを奨励する法律が通過して、交易の増進に役立つことが分かるならば、国王は、スコットランドの臣民たちに対して、植民地の利益を考慮して、国王がそれまで他の領土の臣民たちに許して来たのと同等の権利と特権を賦与することを快く宣言する。

それは、灰色でやせ衰えたスコットランドと言う場所に、＜西＞インドの日の光を充満させ、東インド会社、アフリカ会社、さらにアメリカやレヴァントと交易を行なっている、その他のイングランドの会社ももっぱら享受して来たほどではないにしても、将来にわたる大きな繁栄を約束する、あたかも窓が一つ開かれたようなものであった。ただし、それは、国王から期待が寄せられただけのものであった。スコットランドの王冠がロンドンの彼のところにもたらされた時は、国王はその王冠を受け入れたのだったが、彼はその国を単なる補給の中心、ないしは貯蔵倉庫と考え、その議会や特殊な優越感から、期待感を持ったのであった。2年の間、スコットランド商人たちと、その盟友、そして議会ならびに枢密院で商人たちに買収された人たちは、このような機会を求めて、働きかけを行ない、このように協力して来た。1693年6月、スコットランド国会が、国王と戦争状態にはない国々との交易を行う株式会社設立の許可を与える一般法を通過させた。それは書類の形になったが、スコットランドにおける国王の主だった従者たちにせよ、イングランドの貿易会社にせよ、それ以外の何者かになることなどは望んで

いなかった。

しかし、スコットランド人の精神の中には、ずっとある変化の兆候が存在していた。60年の間、この国民は、宗教上、あるいは政治的な戦争において同胞殺戮の苦しみにより衰弱し、その知的なまたは身体的な能力を浪費したり、スコットランドの若者たちが、フランス、ドイツ、オランダでの軍役で血まみれの諍いを継続するために従軍した時に、その隙間をスコットランド旅団の鮮やかな国旗で埋めたりして来た。今や、その最初にして、真実の歩みを、戦士や殉教者の過去から、商業と産業の未来へと振り向ける時となった。それは失敗や挫折があり、過去の歴史の経験に劣らぬ悼ましい悲劇に遭遇するだろうが、その眼を未来から逸らしてはならない。ダンビラや聖書によりスコットランド人が獲得に失敗したものがどれほど大きなものであれ、何か別のものが発見されるはずである。同国人の誰にも劣らず剣を揮えて、それをトルコ人に対して証明した、サルトーン・フレッチャーは、国民の構想力のこの新たな芽生えを理解していた。「より強力な力によって結合され、方向が与えられるならば、国民の思想や考えはすべて、交易へと向い、その発展のために協力し合うと思われるから、これこそが、われわれを、現在の惨めで絶望的な状態から回復させる唯一の手段である」。

悲惨は厳しいものであった。スコットランドの交易と勤労とは取るに足らない状態だったから、それが消失したところで、ヨーロッパの商業にとってはほとんど相違がないし、ましてや世界のそれ以外の部分に対しては何の関係もなかった。1603年の王国同士の連合は、そこに暗示されていたような機会の同等や平等はもたらさなかった。90年の後、気がつけばスコットランドは、従属的な国民となっていたのである。神学者たちはかつて、何人の天使がピンの天辺に立つことができるかの論争をしたし、スペインの僧侶たちは、教会の眼から見て、インディアンが人類であるかどうかを言い争ったが、権利や特権などの観点からして、スコットランド人は、どの点で、いつの時点で、イングランドの臣民と考えられるようになったか、という問題に対して、イングランドの法律家たちは頭をひねったのであった。その島には、二つの経済、二つの国会があり、一人の国王がいたが、第二次スチュアート王朝以来、国王はおおむね、時には全くイングランドの王の立場をとった。これでは、およそ、空気や感情の問題でもなかったのである。スコットランドは、イングランド占領軍の重い負担を支えている限り、国家的な貧困から回復することはなかった。その世紀<17世紀>の初頭には、スコットランドも、イングランドとの自由貿易らしきものの利益を受けたが、共和国に押し付けられた連合によって、これは法的には認められていたことであった。王政復古期のスチュアート朝の下で、スコットランドは政治的独立を回復したが、1660年と1663年の航海条例が容赦なく強制されると、自由貿易と言う一国としての優位を喪失した。

このような法律の条項がスコットランドの商業に、見えない足かせのように覆いかぶさり、イングランドに対するその国の経済的従属を増加させた。イングランド、アイアランド、ウェールズおよびトウィード川沿いのベリクの船舶、もしくはそこを出発して、

船長と乗組員の4分の3がイングランド人である船舶以外には、アフリカ、アジア、もしくはアメリカにおける国王の所領から、諸商品を輸送することはできなかった。いかなる外国商品であっても、イングランド船の船底か、原産国の船舶でなければ、イングランドに入ることができなかった。こうしてスコットランドの海運業がスコットランドの取引に限定されたので、船体それ自身は、大部分オランダ製か、ドイツ製となった。スコットランドの造船所は、1世紀前のようにヨーロッパ諸国の国王のために巨大な戦艦や商船を作り出すことはもはやなくなり、コペンハーゲンの王立造船所で働くスコットランド技師もいなくなった。スコットランドの国会側も同様の性質を持つ報復的な法令を通過させたが、これでは、自分の仲間たちから拒否されて、バットもボールも持たないので、誰も自分とは遊んでくれないと表明している子供のイライラした反応でしかなかった。

スコットランドの貧弱な産業、服地、家畜、漁業、石炭、食塩や鉛のすべてが、イングランドの競争ないしはイングランドの規制と、意気を削がれた結果としての不調による被害を被った。調子のよい時には、特にノールウェイからスコットランドに価値ある収入をもたらした、スコットランドからの穀物の輸出が、飢饉や干ばつなどの予測できず、制御不能となる年には、最低線まで落ち込む可能性があった。強力で、相互的な輸出貿易がないので、スコットランドは、イングランドが輸入し、国境を越えてスコットランドに売却され、その支払いにはスターリングを当てていたものに、大きく依存した。スコットランドの貴族や中流階級は、イングランドの毛織物から出来た衣服を身に付け、イングランドの銅製品や真鍮製品を自分たちの台所設備とした。スコットランドの鍛冶屋はスウェーデン産の鉄を使い、桶屋はイングランドやフランダースで製作された箍を買い入れた。スコットランドのビールの最上のもは、イングランド産のホップを材料にして醸造され、スパイスや砂糖、レヴァントの果物は、イングランド商船の船底から出てきた。彼らは、イングランド製の皮革を使った鞍で馬に乗り、スコットランドの収穫がよくない場合には、イースト・アングリアの穀物を原料に作ったパンを食べ、外国産のムスケット銃やオランダ製の火薬で戦争を遂行し、イングランドから売られた薬品で自らの外傷の手当をしたのであった。<sup>2</sup>

革命以来、こうした不運は、南の王国との好意的な連合、または少なくとも順差額を伴う関税連合によって治療されうるとの意見が広がっていた。しかし、もっと広く、強力な希望、ないしは頑固な誇りに適うそれは、スコットランドが、イングランドと同様の、商業・植民地上の大勢力となることであった。東インド会社やアフリカ会社の領域を踏み荒らす、もぐり商人の国ではなく、船舶、人口、および植民地と言った点で対抗できる、自由で独立の国家となることであった。

---

<sup>2</sup> この時代の諸事情に関する生き生きとして、なおかつ学問的な説明は、T.C.スマウトによる、『合邦前夜のスコットランドの貿易、1660-1707年』に見出される。

スコットランドの植民地化に対する努力は、これ迄とても哀れで悲惨なものであった。6年前に、ファンディ湾沿いの勇敢な植民地がイングランドとフランスとの戦争中に大惨事になったが、その生き残りの全ては、自らの爵位を労することなく購入し、それぞれが植民地に対して6名の人手と1000枚の銀貨を寄付したノヴァ・スコシアの准男爵の子孫であった。もっと最近では、ニュー・イングランドのクェーカーによる植民地とカロライナにおける契約者たちの避難がいずれも失敗して、一方は、イングランド人に破滅させられ、他方は、スペイン人による戦争の惨禍に晒されることとなった。それでも、アフリカや新世界には、何千というスコットランド人がいた。彼らは、失われた大義の犠牲者として流されて来たので、そうでない場合も少なくないが、ロープや鎖で括られた状態であった。クロムウェルによるダンバーの特赦の後、ヴァージニアやニュー・イングランドに1000名が送られてきた。ウスターにおける別の赦免の後、そのほとんどはハイランダーであった1500名が、ギニア沿岸で売却された。クロムウェルに対する1654年のハイランドの反乱での悲惨な敗北によって、新たに獲得されたジャマイカのイングランド植民地には、それ以上の従者や植民地労働者たちが拘束を受けることになった。ボズウェル橋後とグレアムの怒り狂った武力による迫害の間に1700名の契約派たちがアメリカに流された。モンマスを支持して蜂起したアーガイル伯が失敗した1685年には、キャムブルー族が、この投機的な賭けによって相当の儲けを手にしたスコットランドやイングランドの船主たちによって、植民地に連れて来られたのだった。

その後更に150年もの間続くことになった悲しむべき離散の一部として、この者たちは、スコットランド政府自身にとっても、扶養するには多過ぎるし、処刑するには余りに有用な、泥棒、乞食、ジプシー、売春婦、貧民、そして放蕩人たちとなった。イングランドの植民地開拓者に言わせれば、このスコットランド人たちは、優れた、信頼に値する奴隷であったので、ある植民地の総督は、船賃を負担した上に、1年間の苦役の後には自由を与えるとの約束で、おそらくはさらに3000から4000人を使用することを望んでいたのだそうである。

あの革命の数年前には、スコットランド商人たちは、血まみれたスコットランド旅団の軍旗ではなく、彼らの会計事務所こそが、自らの国民の未来の栄光となりうるものとかろうじて信じるようになった。1681年12月、彼らの中の82名が、イングランドに倣い、エディンバラ商人会社を組織した。彼らの象徴は、驚くべき成長を示して、黄色い花を付ける地元の灌木から出来た、一本のホウキであったが、彼らは会合をする度に乾杯を唱えていた。彼らの約款の定めでは、会社に参加する者以外の誰もその都市で営業を行うことができないことになっていた。交易の神と無二の親友である戦闘の神を承認して、営業はすべて嘆願の祈りによって開始された。「全能で、不滅の神よ、海はあなたのもの、さらにあなたの御手によって陸地は生成しました。われらの現在の営みを、海と陸との恵みで満たせたまえ」。

この国<スコットランド>についてはそうは言えなかったが、1691年までは、その

会社は実際に繁栄していた。死亡したメンバーの言い伝えによると、それ<会社>は、残すとすれば孤児以外に何もない人々の女子教育のために、学校を建設した。670ポンド・スターリングで、それ<会社>は、コウゲイトのマグダレン・チャペル横の、オックスフォード卿の四辺形の屋敷を購入した(閣下がスチュアート朝国王の鼻肩だったので、彼はその売却に異論をとることはできなかった)。その礼拝堂には、金のスタンプを入れた119枚の黒いスペイン皮が展示され、建物の裏に面した空地は快適なボウリング用の芝生に変わった。

スコットランド国会の第五会期におけるトウィードデイルの約束が確実なものとなったのは、この会社の構成員が行った根気強い努力の賜物であった。グラーズゴウ商人がロイヤル・バラでの契約に際して、スコットランド植民地の必要性を熱心に勧めた1691年には、会社の構成員とグラーズゴウ商人とは同様の意見を持っていた。1693年に外国貿易振興法が通過すると、彼らは、「アフリカ、アメリカその他の諸外国沿岸との交易を促進することによって、この国にもたらされるはずの大きな利益」を強調する契約に署名する48名となり、この交易会社のための特許を国王が供与するまでこの会社のために誠心誠意働くことに合意して、各自が3ギニーずつ費用に醸金した。以上の署名者たちの中には、同時にまた、パタースン、ダグラス、ネルンと、チーズリーその他のロンドンにおけるスコットランド商人たちがおり、この人たちがおそらく、広い経験と鋭い見識によって、これを扇動するための靈感を与え、組織を形成する中心となったのであろう。

と言うのも、寛大な国王からの最初で真実味のある返答がやって来たのは、彼らを通じてであったから。8か月後、ウェストミンスターホールの下院にある喚問席にあって、パタースンは、そこから投獄されることもないではなかったが、ちょっとした考えが得られるのに気が付いた。チーズリー氏が、5月のある日に訪れた。チーズリー氏の言うには、交易を振興する新たな方法についてざっくりばらん話があった。パタースン氏は、彼に「東インド会社を立ち上げる計画」を提示したが、それをチーズリー氏が数日後にスコットランドに持ち込んだのだった。

実際にはそれ以上のこととなった。長い時間、日月、ひよっとすると1年以上。デンマーク通りでのコーヒーやチョコレート、あるいはアルホロウズ・ステイニングでのハナ・チーズリー氏からのホット・パンチによる歓迎のやり取り。椅子の隅っこに掛っている脱ぎ捨てた鬘、長い陶器のパイプから上がる紫煙、新しい針を削るナイフのきしむ音、ロウランド中から聞こえる甲論乙駁のスコットランドの意見。ロバート・ダグラスは、パタースンのダリエンの夢をひどく軽蔑しており、その議論の一切合切をペシヤンこにする積りだったので、パタースンは彼のことを当てにならないと思っていたし、デイヴィッド・ネルンは、スコットランド貴族とその軽率な息子たちのためのロンドンにおける銀行家として行動していたが、リーブン卿やターバット卿に書を送って、その支持を求めたことを知らせた。パタースンが主張したのは、この会社が両王国の共同事業でな

ければならぬと言うことであったから、その取締役には、コーエン・ダゼヴェドやユグノーのポール・ドミニクのような人や、ロバート・ランカシャーのようなイングランド商人、さらに東インド会社の独占を警戒しており、インド交易船の帆が水平線から途絶えるや、必ず船を使いつぶしてサッサと逃げてしまうに相違ないもぐり商人の備えをするよりも、自分たちの資本をもっと有利に使うことを望んでいたトマス・スキナーを含めることであった。

その計画は、パタースンの見事な手際で書き上げられ、彼の明晰な頭脳と野心に満ちた想像力の賜物であった。それはダリエンに付いて何ら言及はしていないが、その枠組みを描き、権限上ではただ国王にのみ従属する、信じ難いほどの権力を持つ交易会社の権利と特権を規定していた。北から朗報が届いた時、それは日光を背にしたパタースンの書き物机の中にあった。チーズリーがそれをエディンバラに持ち込み、たいそう急いで興奮状態であったが、それから、スコットランド国会をこれまで通過したどの法令よりも気高く、虚栄心に満ちて、破滅を招くことになるもののひとつが、起草されたのであった。

<原書 21 ページに続く>